

想像力を駆使することによって、客観的に考え、**抽象**

的に物事を捉えることができれば、各種の苦境から自分を救うことができる。ちょっと考え方を变えるだけで、救われることだってある。ここが、是非とも強調しておきたいところである。僕の友人には、自殺してしまった人が数人いる。周囲の誰も、彼らを救うことができなかつた。たぶん、彼ら自身しか、救えなかつただろう。多くの場合、自殺する人の思考は、主観的であり、具体的すぎる、と僕は感じている。

つるかめ算が凄いとこは、「もし、つるの脚が四本だったら」と想像するところにある。そんな四本足のつるはこの世にいない。それでも、問題を解くために、それを想像するのが人間の「凄さ」なのである。痺れるくらい凄まじい発想ではないか。この凄まじさを体験することこそが、算数の醍醐味であり、教育の本質とって過言ではない。考えただけでも、身震いするような素晴らしい体験になるだろう。子供たちにこの「痺れるくらい凄まじい体験」をさせられる算数の先生はいるだろうか？

であれば、**活断層の上を新幹**

線は走っていないだろうか、と何故心配しないのか。大地震があつたとき、原発は事故を起こすかもしれないが、そこで直接死亡者が出る確率は低い。現場にいるのは、原発内で働く職員だが、これらの人たちも、また周辺地域の住民も、避難をする時間的余裕があるだろう（現に、今回の大事故でもそうだった）。一方、活断層の上を走る新幹線に乗っていれば、何百人、何千人という命が奪われる可能性が大きい。そういう考えを誰もしないのは何故だろう？

子供や若者の中には、「友達ができない」という悩みを抱えている人が多い。その種の相談を受けることも実際に頻繁である。そういう人には、「どうして、友達がほしいの？」と尋ねることにしている。「友達がいないと寂しいから」と答える人がほとんどであるが、「では、どうして寂しい状態がいけないの？」と問うと、これにちゃんと答えられる人はまずいない。不満そうに黙ってしまうのだ。

彼らは、「寂しいことは悪い状態だ」と考えていて、「友達がいれば寂しくない」と勝手に信じている。なんの根拠もなく、そう思い込んでいるのである。だから僕は、「寂しくても悪くない」こと、そして「友達がいても寂しいかもしれない」ことを説明するようにしている。そんなことは信じられない、と反発する人もいるが、つまり**自分の思い込みが悩みの原因だ**ということに気づいてない（気づけない）状態といえる。さて、貴方はどう思うだろうか？

思考空間を彷徨うトリップ

若いときには、とにかくのめり込んだ。夢中になった。生きていることも忘れるくらいだった。たとえば、食事を三日くらい忘れていたこともあるし、トイレでも風呂でも、そして寝るときさえ、そのテーマが頭から離れなかった。なにを見ても、自分が考えているテーマに見えてしまう。そういう抽象的な思考空間を彷徨ような体験をすることは、普通の人には滅多にないだろう。これが仕事だなんてことは綺麗さっぱり忘れてしまい、現実世界の自分が今、何歳で、どこにいて、たとえば、家族はいるのかいないのか、そういうことさえ、数秒間思い出せないくらい、「あっちへ行ってしまおう」のである。

三十代になって、助教授（のちに准教授に名称が変更）に昇格した頃には、そういったトリップは、もう少なくなっていた。スタッフも増え、研究費も増えたし、同時に責任も増した。遠くへ出張して、会議に参加することが多くなり、他の研究者と会う機会も増えた。大学内の仕事（運営や教育）も忙しくなるので、もう研究は若い人に任せなくてはならない立場になった。そうでなくても、あんなトリップができるのは、やはり若い頭脳だけだろう、と今になって思う。

このように世間離れした研究者でも、その分野でトップへ上り詰める頃には、当該分野の常識を身につける。この常識のない若い研究者ほど、突飛な発想をし、斬新な研究アイデアを思いつくだろう。若い人がやろうとしていることに対して、つい「それは上手いかないよ」とアドバイスしたくなるが、それを言わないように、いつも自分に言い聞かせていた。僕自身、みんなから「上手いかないよ」と言われたことに挑戦をして、結果的に一人前の研究者になれたのだ。

小説というものを書いたことはなかったので、どんなふうに行けば良いのかわからないが、しかし、小説を読んだことはある。どういうものかもわかっている。だから、書いているうちに、効率の良い生産方法を見つけることができるだろう、と思い、とにかく書いてみることにした。書こうと思った次の日には、もう書いていた。

長編を何作か続けて書いたが、**自分なりの書き方がだいたい決まったのは、三作めだった**と思う。その後も少しずつ修正を加え、十作めくらいには、ほぼ手法的に確立した。このあたりの詳しい経緯は、既に他書で記しているのだから、ここではこれくらいにしよう。

小説を書くことで、これまでにない体験を幾つかした。それらはなかなかエキサイティングで、想像していたとおり、研究の初期に味わった感覚とよく似ていた。つまり、抽象的なものをぼんやりと考え、発想し、それから具体的な計算をする。研究の場合は、上手くいく確率がかなり低く、上手くいったときだけ発表するわけだが、小説は、上手くいったかどうか判然としないし、とりあえず、なんとかかなってしまう。自分で上出来だと思っても、売れなければ仕事としては失敗だし、これは失敗作だと感じていても、予想外に人気が出るものも珍しくない。

しかし、作業としては、両者は非常に似ている。その本質は、キーボードに向かい、考えながら、文字を書くだけである。たまたまミステリイというジャンルを選んだので、論理的な思考を取り入れる点でも類似していた。ただ、小説における論理性というのは、はなはだ初歩的なレベルのものでしかない。そうでないと、一般読者に受け入れてもら

えないからだ。

そう、一番の違いは、この「受け入れてもらう」という点にあった。研究は、一般の人に受け入れてもらう必要がほとんどない。正しければ受け入れられるし、間違っていれば受け入れられない、というだけだ。特に、大学の先生は、給料をもらって自分の好きなことを研究しているから、スポンサの機嫌を取るわけでもなく、商品化に結びつかなくてもかまわないし、たとえ競争に負けても、経済的な損失はまったくくない。

一方で、小説家は、人気商売であるから、自分のやりたいことを勝手気ままに進めるわけにはいかない。基本的にはそうである。ただ、僕の場合は、もともとの職業があったし、デビュー作が出版されたときには、既に三十八歳だったから、小説家としての地位をずっと守り続けようという野心もまったく抱かなかった。

これまで、ベストセラになるような作品は一つもなかったけれど、幸運なことに、気に入ってくれた人たちがある程度的人数存在して、次々と書いているうちに、当初予想していた額をはるかに上回る収入が得られるようになった。

ただし、小説を執筆する側は、本当に「体験」するのである。そこには、自分の発想があり、判断があり、現実に近い楽しみも驚きもある。はっきり言って、読むよりは書いた方が何百倍も面白いことは確かだろう。

研究者をしているときは、とにかくがむしゃらに働いていた。がむしゃらとも感じなかったし、働いているとも意識しなかったが、あとになって客観的に振り返ると、非常に異常で危機的な毎日だったと思える。その習慣があったためか、小説を書くようになって、依頼されたまま引き受け、素直に書いた。実は、自分から「こういうものを書かせてもらえないか」と申し出たことは一度もない。すべて、出版社から依頼があつて、それに応えた結果である。研究をするときのように、けっこう集中して書いてしまった。おかげで、僕は「多作」で「速筆」な作家ということになった。気がついたら、そうなつていただけである。

爆発的に売れた本は一冊もないが、どれもそこそこ（特に、発行から数年して）売れたし、短期間に沢山の本を書いたため、印税として多額の収入を得た。気がつけば、貯金は一生かかっても使い切れない額になっていた。

それで、研究職からも、作家業からも引退することにした。これが、数年まえのことで、五十一歳になったときだった。

たとえば、「逆転の発想」みたいな本を読んで、納得したつもりになつていても、そんな考え方ができるようになるはずがない。あれは、「あとから振り返ってみたら、逆だったな」というだけの話であつて、「逆に考えれば良いアイデアになる」という手法

は成り立たない。

学び方、考え方といった具体的な手法を数々取り入れたところで、それはその場限りの、つまりお金を払って庭師さんに作ってもらった庭園であって、自分が作り上げたものではないため、やはり次第にアイデアは枯れ、土地は痩せてくる。毎日こつこつと雑草を取っている（抽象的な思考を続ける）人の庭には、どう頑張ってもかなわない。

結局は、自力で頭脳の世話をしなければ、新しい発想、優れたアイデアが生まれる土壌は育たないし、また維持もできない。

たしかに、知識を問われた場合に、答を思いつかなければ、「わかりません」と答える。「知りません」と言う人は少数だ。けれど、ほとんどの問いは、「これを知っていますか？」という種類のものであって、「これがわかりますか？」ではない。